

連載 （供覧） いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第十四回 祭祀の民の受難

南出喜久治（令和7年3月15日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

祭祀は、宗教が世界に蔓延するまで、すべての人類が依拠してきた信仰でしたが、キリスト教、イスラム教、仏教などの世界宗教なる理性で組み立てた信仰が出現したことによって、たとへば、キリスト教によつて、欧州では、古代ケルト人や原始ゲルマン人などの祭祀の民は、殺され、迫害され、改宗を強制されてきた歴史があります。その他、世界各地で、祭祀を含む民族信仰が著しく迫害され壊されてきました。

殺されたりしたのは祭祀の民だけではありません。祭祀における祭事を執り行ふ斎場（いつき）である「森」や「林」を悪魔の生息地として決めつけ伐採の限りを尽くし、祭祀の民から祭祀を奪ってきた歴史があります。

ローマ軍を率ゐて、古代ケルト人の居住地域であるガリアを制服したカエサルがガリア戦記といふものがあります。フランスのパリは、古代ケルト人の一部族であるパリジイ人の居住地域であり、これがパリの語源です。そして、シテ島は、ケルト人の祭祀を行ふ中心地でした。ケルト人の信仰は、ドルイドといふ神官が祭祀によるものです。ドルイド教といふ宗教ではありません。これは宗教ではなく祭祀の信仰です。

ところが、ここには、侵略したキリスト教のノートルダム寺院などが立ち並び、ケルト人の面影を残すものは全く存在しません。

また、宗教相互の関係においても、宗教の違いによつて、異教徒は殺され、迫害され、改宗を強制され、さらに、同じ宗教の中でも、教義の解釈を巡り異端者とされて迫害される事態を多く生んでゐます。

人を救ふはずの宗教が、異教徒などを殺めることを正当化します。これが宗教の本質です。「この指止まれ、止まらなければ殺す。」

いまではこの露骨さは薄まりましたが、排除の論理の本質は変わりません。排除の論理

が支配してゐるのが宗教です。ですから、世界に宗教が存在する限り、世界の平和は実現しません。

このやうに、すべての宗教には、根本的な矛盾を抱へてをり、宗教間の対立や教義の対立は、際限なく続くのです。